２０２３年９月３日　青戸教会　説教『へりくだる者』　高橋克樹牧師
聖書　箴言２５章２～７節ａ、ルカ福音書１４章７～１４節

本日の「客と招待する者への教訓」は２つの話が合体したものです。場面としては先週取り上げた１４章１～６節の続きとなっています。ファリサイ派の人が安息日にイエスを食事に招いて、イエスを訴える口実を得ようとしました。水腫を患っている人を癒すところを捉えてイエスを批判しようと企んだのでした。けれども、イエスにやり込められてしまいました。

その食事の席で、イエスは招待客が上席を選ぶ様子に気づいたのです。そこでたとえを話し始めるのです。内容は神の国のたとえ話になっています。婚宴に招待した主人は神を表していて、招待された客は私たち信仰者のことです。神に招待された人々は、これから食事が始まるのを楽しみにしています。福音書では、神の国はたびたび結婚披露宴のような喜び溢れる宴席として描かれています。けれども、神に招待された人たちが始めたことは、上席を選ぶことでした。ここでの上席というのは、神の御前において自分が正しく、信仰深いことを出席者たちに示す席のことです。つまり、神に招待された人たちは、誰が神の前にあって正しいか、誰が信仰深いかを誇るために上席ばかりを選んでいたのです。

そこに彼らを招待した主人である神が現れます。自分が正しいと考える人、自分が信仰深いと思っている人を末席に行かせる行動に出ます。逆に、主人である神は、自分は過ちの多い者で、信仰が浅い者だと考えている者に上席に来るように勧めて、自分の近くに来るように促すというのです。こうして１１節にあるように「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」ような事態が出現するのです。神は自分に欠けがあって、弱い人間だと自覚している者に「もっと近くに来なさい」と呼びかけてくださるのです。別の言い方をするならば、高ぶる者とは、神に対して何か自分でお返しができると考えている人のことです。自分の中に、神に対して貢献できる力があると考えているのです。これに対して、へりくだる者とは、神の恵みを受けるだけで、何のお返しもできないし、神に貢献するようなものは何も持っていないという人のことです。

さて、１２節からイエスは２つ目の話を、招待をした人に対して話し始めました。昼食会や夕食会を催すときは、友人や兄弟や親類、近所の金持ちを招待してはならないと言うのです。むしろ、貧しい人や体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招待しなさいと言います。理由は単純で、そういう人たちは招待に対するお返しの宴席を用意することができないからである、というのです。

つまり、２つのたとえ話に共通していることは、見返りを求めないで愛しなさいというのです。私たちの通常の人間関係では見返りを求めてしまいます。こんなに優しくしているのに、相手から優しく接してもらえないとしたら、その人間関係は早晩破綻してしまうでしょう。この世の価値観では、自分が相手に与えた分のお返しを求めるのは適切な利害関係だし、相手に損害を与えてしまったら、その分を賠償するのが当たり前のことだからです。しかし、神と私たち信仰者の関係は違います。神は信仰者からお返しがなくても、見返りを求めず、信仰者を愛して親しい関係を築いてくださいます。この神の無償の愛があるからこそ、私たち信仰者は自分が神の愛にふさわしい存在だと思えなくても、神の御前に立つことができるのです。神から信仰者に対しては無償の愛が届けられているのですが、そこには信仰者自身の評価がどのようなものであっても構

わないのです。神の愛は人間の側の評価で、その愛の大きさや深さが左右されるようなことは起こりません。

ところがファリサイ派の人々は、いつも人々から先生と呼ばれて尊敬を受けて、招待されればいつも上席（上座）に案内されていました。だから、自分は上席に就いて当然だという感覚が身についてしまっていたのです。このような感覚が身についているために、自分は神に自力で近づくことができていると思いあがってしまうのです。ですから、自分自身の自己評価が常に高くて、自分が罪人であるという感覚を持つようなことはないのです。もちろん、他人の評価をいつも気にする生き方をしているために、この世的に評価の低い人種とかかわりあうようなことは避けてしまいます。

けれども、この２つの話を日本人の謙虚さの観点で読み込んでしまうと、イエスの話された意味から外れてしまいます。日本では、上席を促されても、普通は遠慮する傾向があって、末席を選んで座ったり、後ろの方に身を置いたりします。それが謙虚であるという感覚を持っているからです。日本では出しゃばらないことが美徳なのですが、このたとえ話は「自分なんか、後ろの方で、端っこでいいです」という謙譲を美徳とするような話ではないのです。

私たちは誰にでも他人に認められたいという承認欲求を持っています。日本人が謙虚さを美徳とするは、この承認欲求を表に出さないことが人間として成熟していると考えるからです。他人に対して殊更威張ってしまったり、自慢したがる人は、承認欲求がそうさせているのです。誰でも褒められれば嬉しいものですし、逆に軽んじられると誰でも腹立たしく思うものです。

本日のたとえ話に出てくるように、上席に座ろうとするのも、承認欲求の一つです。けれども、私たち人間の承認欲求を満たすものは、社会的な地位でも、財産の多さでも、ましてや上席に座る席順でもないのです。普段、私たちはこの承認欲求を満たすために、自分はどんな力が発揮できるか、自分にはどのような能力があるかということをもって、世間に証明しようとするのですが、それが露骨だと嫌がられてしまいます。このように、謙虚であることが美徳とされる日本人のメンタリティーから見て、１１節の「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」という言葉は、私たちが常に謙虚に自分自身を高く見積もってはならないということを一般論として意味する教訓ではないのです。

そうではなくて、神はへりくだる者を高くするというのは、神の御前に自分が立つにふさわしくない者だという謙虚さを神が良しとされているのではないのです。信仰者の自己評価がどのようなものであっても、神は等しく自らの近くに来なさいと呼びかけてくださっているのです。その招きを自己評価が低いがために遠ざけてしまうことがないようにすることが求められているのです。他人から善くしてもらうと、お返しをしないと気が済まないという人がいますが、それは人間関係で相手に有利な立場のままで先手を握ってしまわれることが嫌だからです。しかし、神は、ご自分が私たち信仰者を無条件で愛しているからといって、ご自分の意志通りにロボットのように操作しようとはされません。神は人間の側に欠けがあっても、弱さの中で迷いあぐねていてもいいのです。信仰者の側の神に対する思いがどのようなものであろうとも、神は愛することをやめませんし、その導きを果たし続けます。その導きに気づいたとき、私たちは神にへりくだる者としてすべてを委ねることができるのです。